

動詞接頭辞 3A-が表わす開始意味について

金子 百合子

0. はじめに

言語に動的事象¹の時間内展開を表わす特別な表現形式が備わっており、特に、開始、継続、終了などの典型的な動的事象の位相を言語上で提示することは、ある程度言語の別を超えた普遍性を持つことと考えられる。その共通の意味的基盤のもとに、諸言語間において位相意味を扱った対照研究が行われている(Петрухина 1997; Храковский 2001)。

位相意味のなかでも、開始位相を表わす意味が、他の位相意味と比較して、最も意味的に自立しているとされる。マ스로フは、行為の終了位相の取り上げは限界の達成や限界への接近の意味としばしば融合し、中間位相(継続位相)は限界への非達成性、未終了性と融合するので、行為や状態の開始位相の取り上げのみが、多様な言語で広く表される、より自立的なアスペクト意味を与えると指摘する(Маслов1978:18)。また、意味論、アスペクト論において、「継続および終了の意味は開始の意味を介して解釈することができる」とする立場は、開始意味がその他位相意味を構成する基本的な意味単位として扱われていることを示す(Апресян 1974; Wierzbicka 1967; Гловинская 1982, 1998 и др.)²。

もっとも、これら論じられていることは、現実世界で時間内展開をなす動的事象に対する私たちの通常の認識、“始まりなければ、終わりなし”，という直観からも、自然に受け止められることである。したがって、位相意味の提示があらゆる言語を通して普遍的だと仮定するならば、開始位相についてこそ、その普遍性は最大限に現れると推測できる。

このように、諸言語における開始位相表現の普遍的なあらわれをマクロ的な視野で捉えるならば、私たちは個別言語内における多種多様な開始表現をミクロ的視野で考慮することも必要となる。各言語は開始を表わす表現手段を複数そなえており、互いに類義関係にあるが、それぞれ独自の意味特徴・統語的特徴を有しているので、意味領域、使用範囲が完全に一致するものは無い。ロシア語に関して言えば、開始を表わす主要な表現形式には、(1)位相動詞(начать, стать, наступить, настать, приступиться), (2)動詞接頭辞(за-, по-, вз-, раз-ся), (3)小詞(давай, и ну, и, а)などが挙げられる(Храковский 2001:162-172)。個々の手段がどのような開始意味を表わし、それらが個別言語における「動的事象の開始」という意

¹ 本稿では、動詞形式によって表わされる行為、状態、活動などの事態一般を指す名称として、「動的事象」という用語を使用する。

² продолжить P – ‘не начать не P’, перестать P – ‘начать не P’ (Гловинская 1998:130)

味的カテゴリーの中でどのような相関関係にあるか、という点は、手段別による詳細な個別研究が必要であるのは言うまでもない。そのような個別言語の研究を通して、その言語における当該の意味的カテゴリーの全容が明らかになり、他言語における共通の意味的カテゴリーとの対照が可能になる。本稿では、ひとまず、ロシア語の接頭辞 *за-*によって表わされる開始意味を検討する。

1. 問題提起

日本語の開始を表わす補助動詞「～始める」「～出す」は、「食べ始める」、「歩き始める」「読み出す」、「動き出す」のように、多様な基幹動詞¹と結合する。一方、ロシア語において開始を意味する接頭辞の *за-*は、*зашагать (по комнате)* ‘(部屋を)歩き回り始める’、*заговорить* ‘話し出す’、*заработать (о моторе)* ‘(モーターが)作動し始める’等はあるが、‘(本を)読み始める’意での *зачитать (книгу)*、‘(何かを)食べ始める’意での *заесть(что-л.)*などは、習慣となる事態の開始の意味を除いては、通常、許容されない。

言い換えれば、日本語では、基幹動詞が自動詞であれ他動詞であれ、そのアクチュアルな動作の開始もポテンシャルな(習慣的)動作の開始も「～始める」「～出す」で表わすことができるのに対し、ロシア語では、他動詞で表わされるアクチュアルな動作の開始を接頭辞 *за-*で表わすことができない場合が多い。その際、アクチュアルな動作の開始は *начать*、*стать* 他の分析型で表わされる傾向にある。

(1a) 彼は机に座ってドストエフスキーを読み始めた。

(1б) Он сел за стол и *зачитал Достоевского / начал читать Достоевского / стал читать Достоевского.

(2a) 彼は定年後ドストエフスキーを読み始めた。

(2б) После того, как он вышел на пенсию, он зачитал Достоевского / начал читать Достоевского / стал читать Достоевского.

(3a) 彼はテーブルについてウオッカを飲み始めた。

(3б) Он сел за стол и *запил водку / начал пить водку / стал пить водку.

(4a) 彼はロシアでウオッカを飲み始めた。

(4б) Он в России запил водку / начал пить водку / стал пить водку.

本稿では、まず、接頭辞 *за-*の開始意味について、先行文献で支持されてきたいくつかの有力な議論を再考し、筆者の見解を示す。次に、開始を表わす *за-*派生動詞としばしば等価的とされる *начать* の位相動詞構文とを比較し、それぞれの表現形式が有する「動的

¹ 本稿では、日本語の複合動詞における前項動詞、およびロシア語の派生動詞における、派生前の無接頭辞動詞とともに「基幹動詞」と呼ぶ。

事象の開始」の概念構造を検討する¹。両者における開始の概念構造の差違こそが、接頭辞 *за-*がその基幹動詞としてアクチュアルな動作を表す他動詞を許容しない原因となっていることの論証を試みる。

2. 接頭辞 *за-*の開始意味

接頭辞 *за-*の開始意味は、79年プラハ版『ロシア語文法』(以降、略称 *РГ-79*)、および80年ソ連科学アカデミー版『ロシア語文法』(以降、略称 *АГ-80*)といった代表的な文法書で、次のように記述されている。

АГ-80 (597) 「開始は後続する持続性を有した行為への着手として提示される」

РГ-79 (246) 「行為の開始位相は、ある一定の“空間”を占めるような状態もしくは無対象の多方向に向けられたプロセスとして提示される」(二重引用符原著)

その他の研究者による *за-*の開始意味の定義も、ほぼ、*АГ-80*のそれと似通ったものである。「突然²の開始の後(基幹動詞が表わす)行為が継続する」(Зализняк 1995:146, 括弧内筆者)、「持続的行為の開始表現」(Петрухина 1996a:100)、「持続的行為の開始瞬間」(Карамышева, Мирошникова 1999:19)といった特徴づけがなされているところをみても、接頭辞 *за-*は、「開始瞬間+後続する持続的プロセス」という、時間軸に沿った意味的まとまりを構成すると捉えるのが一般的である。このような持続的プロセスの開始の意味は、伝統的に起動的開始(инхоативная начинательность)と名付けられてきた(詳細は金子:2001)。起動的開始意味は、*за-*派生動詞の他に、начатьの位相動詞構文によっても表わされる。したがって、このタイプの開始意味において、両者の言い換えが可能となる(заходить по комнате = начать ходить по комнате)。

起動的開始意味を持つ接頭辞 *за-*は、「プロセス的意味を持つ動詞のほぼ全ての意味グループと結合する」(*РГ-79*:247)と指摘されることからわかるように、大変生産性が高い。しかし、その一方で、開始後に持続すると考えられる動的事象の全てが *за-*派生動詞によって表されるわけではない。

(5a) Мотор работает – Мотор заработал. (モーターが動き出した, という意味で)

(5b) Человек работает – *Человек заработал. (人が働き始めた, という意味で)

(6a) Телефон звонит – Телефон зазвонил. (電話が鳴り出した, という意味で)

¹ 本稿では、以降、開始を表わす接頭辞 *за-*と基幹動詞の結合による派生動詞のタイプを「開始の *за-*派生動詞」と呼び、位相動詞 *начать* と不完了体の無接頭辞動詞との結合で開始を表わす文型を「начатьの位相動詞構文」と呼ぶ。

² Зализнякは、接頭辞 *за-*の意味要素に突然性(внезапность)を入れているが、この妥当性について、筆者は現時点では態度を保留する。開始の *за-*派生動詞と вдругなどの副詞が共起しやすいのは事実である。

(66) *Мать звонит по телефону – *Мать зазвонила по телефону.* (電話をかけ始めた、という意味で)

(5a)におけるモーターの始動については、その開始が接頭辞 *за-* で表せるのに対し、(56)の人が働き出す場合には接頭辞 *за-* は許容されない。(6a), (66)の例も同様である。このような差違を説明するためには、接頭辞 *за-* が単に持続的プロセスの開始を表わすというだけでは不十分であり、何らかの形で補足をしなければならない。そこで、(56), (66) が非文となる理由を説明するために、下記の二種類の提案がなされている。

2.1. 「プロセスの欠如—開始—プロセスの存在」について

『ロシア語接頭辞：多義性と意味的統一体』(2001, 以降, 略称 РП)は、接頭辞 *за-*¹の開始意味を、「動詞語基によって表されるプロセスの欠如から、その存在への移行」(РП2001:57)と規定する。たとえば, *мотор работает* は *мотор не работает* と対立するもの(“*работает или не работает*”の関係にある)として解釈されるが, *Петя работает* は通常のコンテキストにおいて *Петя не работает* と対立し得ない, したがって, 人主語の場合, 起動的開始を表わす接頭辞 *за-* を使って **Петя заработал* とは言えないとする (РП2001:57-58)。同様に, *Петрухина* は, 接頭辞 *за-* は, 前提的意味として開始以前のプロセスの欠如を, 主張意味として開始後のプロセスの存在を表わすと考え, 両者の積極的な対立形式の意味構造を[—プロセス] 開始, プロセス²と記述した(Петрухина 2000:196-197)。

しかし, 次のような例は開始以前にプロセスが欠如しているとは考えられない。

(7) *Молодой человек сначала бесцельно ходил по комнате, вдруг вспомнил о чем-то про дело и потом заходил быстрее.*

(8) *Он сначала говорил сдержанно, но вдруг заговорил грубо.*

これらの文は, 基幹動詞で表わされる行為が開始以前に既に生起していたことを表わす。文中で開始以前に欠如していたのは, 行為のプロセスそのものではなく, 開始後に現れた新たな行為様態(*быстрее*, *грубо*)である。同時に, 開始という意味の本質から考えて, 「何か」が開始されるのであれば, 開始される以前にその「何か」は存在しておらず, 開始されて始めてその「何か」が存在する, と考えることはある程度当然のことであり, 通常理解であろう。既に存在していたのであれば, それは「開始」ではなく「継続」として表わされるべきものだからである。したがって, (7), (8)の例が許容されることから考えて

¹ ここで例として挙げられている派生動詞は次のものである: *Петя заговорил. Петя замолчал. Мотор заработал.* (РП2001:57)

² []内は前提意味を表し, 下線部分は主張意味を表わす記号(Петрухина 2000:196-197)。

も、「欠如－開始－存在」の移行を経験する事象はプロセスでなければならないということはない。

では、開始の *za*-派生動詞において、当該の動的事象の存在と欠如は、開始瞬間を境に、常に積極的に対立するであろうか。たとえば、モーターや電話が動作主である場合、それらは性質上、動くか動かないか、鳴るか鳴らないかであり、ひとつの性質的特徴に関する存在／欠如が主体を特徴付ける二つの様態として積極的に対立する。つまり、主体の性質上の特徴を *P* とすれば、*P* が存在し始める前の状態は $\neg P$ のみであり、それ以外にあり得ない。一方、*PI* に従えば、人動作主を取る *работать* は、通常、このような存在／欠如の積極的な対立関係を持たないので、*za*-派生動詞を形成できない。だが、接頭辞 *za*-を許容する「歩き回っている(*ходит*)」においても、その動的事象の存在の有無が、人動作主のありかたを“二者択一的に”，つまり，“*ходит или не ходит*”で積極的に特徴付けているとみなすことは困難である。なぜならば、「歩き回っている」という特徴が存在している人動作主において、その特徴が存在する以前の状態は、別の特徴、たとえば、「走っている」、「止まっている」といった特徴の存在によって、積極的に特徴付けることが可能であるからである。その際、「歩き回っていない」という欠如的状态は、人動作主に対し、暗示的で“消極的な”特徴付けしか与えていない。同様に、アクチュアルな用法において、「歌っている(*поет*)」は *za*-派生動詞を形成し、「読んでいる(*читает*)」は *za*-派生動詞を許容しないのであるが、前者において行為の開始前後におけるプロセスの存在／欠如という積極的対立を認め、後者にそれを認めないと解釈するのは不自然である。

前述したように、開始という意味それ自身が、何らかの対象の欠如状態から存在する状態への移行を表わすとすれば、その意味特徴を開始の *za*-派生動詞に限定する必要はない。また、ある特徴の存在と欠如が、どの程度積極的な対立関係にあるかという点は、その特徴が、動作主に潜在的に備わる性質において、どれほど本質的かという点に大きく左右されると考えられる。

2.2. 「(基幹動詞の)均質プロセス性」について

ザリズニャク(1995)は、(56), (66)における *za*-派生動詞の非許容性を、開始後に持続するプロセスの性格の面から説明づける。ザリズニャクによれば、接頭辞 *za*-を許容する基幹動詞は、「非限界性の均質プロセス」(Зализняк 1995:160)を有する動的事象を表わすことが条件となる。

対応する無接頭辞動詞が均質プロセスを記述するには、それが中間位相から異なる始発位相も終局位相も持たないプロセスでなければならないということである。(Зализняк 1995:176)

つまり、基幹動詞によって表わされる動的事象は、その時間内展開のどの部分を切り取っても、同じ側面を見せる。同時に、終局位相の欠如は、限界の欠如、すなわち直接補語となる対象の欠如を招く。ザリズニャクは、以上の点から、*за-*派生動詞の多くが自動詞であること、言い換えれば、他動詞がアクチュアルな意味で用いられる際に、開始の *за-*派生動詞を形成しにくい事実を説明する(там же)。

先の例で (56)*Человек заработал, (66)*Мать зазвонила по телефону が許容されない理由は、人が働くという行為、電話をかけるという行為は多様で異質な動作の一続きであり、その意味で均質プロセスではない故、と説明される(例：電話をかける場合、まず受話器を取る、番号を押す、呼び出し音を待つ、相手と話す…など)。接頭辞 *за-*と結合する基幹動詞の持つ均質プロセス性については、ザリズニャクの他にも、ペトルーヒナ(1998)、フラコフスキー(2001)等が支持しているが、*мотор заработал* や *телефон зазвонил* などの典型的な場合を除き、開始の *за-*派生動詞全てに適用できるかどうかは疑問である。たとえば、次の例における均質プロセス性はどのように理解したらよいだろうか。

(9) Он закурил (сигарету). (アクチュアルな意味で)

(10) “Уходи отсюда!” – закричала она.

(9)における *закурить* は『ロシア語大辞典』(1998, 以降, 略称, БТС)の定義によると、‘火をつけて煙草を吸いだす(зажечь и начать курить)’である¹。「火をつける」、「たばこを吸う」という異質の動作の一連であり、全体として均質プロセスとは言えない。また、アクチュアルな意味の *закурить* は、煙草類を一本吸うことを意味する。一本吸い終われば、行為終了の限界性を前提とする点においても、ザリズニャクの均質プロセス性の定義に反する。

(10)において、基幹動詞(*кричать*)の行為は、ひとつの意味のある文を発話することである。文を発話する行為は、均一な音が発せられる行為における均質性とは異なる(比較 *зареветь*, *запищать*)。また、文の発話後に行為が終了してしまう点も、ザリズニャクの均質プロセスおよび限界性欠如の概念と相容れない。もっとも、ザリズニャクが述べるように、限界性の欠如が均質プロセス性の帰結として導き出されるものであるかどうかは、疑問である。両者の相関についてはさらなる検討が必要である。

ザリズニャクは、*закурить*, *закричать* を含めたいくつかの *за-*派生動詞の意味を、非本質的な起動的開始意味として扱い、「非本質的な起動的開始性を反映するために、補足的特徴 SPACE を加えることで便宜的な解決策とする」(Зализняк 1995:178)。ザリズニャクの動詞リストでは、直接補語を持ちえる *за-*派生動詞に対し、BEGIN に加えて、SPACE の意味

¹ *закурить* – ‘зажечь (папиросу, трубку и т.п.) и начать курить’ (БТС).

特徴が加えられているものが多いが、他動詞以外のものに加えられる場合もあり、この SPACE という特徴が具体的に何を意味しているか明確とはいえない¹。

しかし、ザリズニャクがこれらの動詞に与えた SPACE の意味特徴、および PG-79 において、接頭辞 *za-* の開始意味が、「ある一定の“空間”を占めるような状態もしくはプロセスとして提示される」と指摘されていることは、*za-* の開始意味において「空間性」という概念が重要なキーワードであることを示唆する(これについては次節)。

クロンガウス(1998)は行為の「均質性」という概念そのものがさらなる説明を必要とするものであり、その概念の妥当性に関しては態度を保留する。また、ザリズニャクによって許容されないとされる例も口語においては許容されると指摘する(下記, (11)(12))。

(11) Это тебе так просто, сел за стол и сразу заработал. (Кронгауз1998:127)

(12) Ну вот, опять она позвонила по телефону, теперь не прорвешься. (там же)

2.3. 「主体の新たな特徴づけとなる動的事象を描写する場面の出現」

上記してきたことをふまえると、接頭辞 *za-* の開始意味に関する二つの議論、すなわち、「プロセスの欠如から存在への移行」にしても、「(基幹動詞の)均質プロセス性」にしても、存在する全ての *za-* 派生動詞のバリエーションを説明することが困難か、少なくとも、不十分であるように考えられる。クロンガウスは、ザリズニャクの均質プロセス性について、均質プロセス性は個々の動詞語彙に備わった語彙的特徴である場合もあるが、接頭辞 *za-* との結合によって動詞に与えられる特徴でもあり、したがって、接頭辞 *za-* が動詞をそのように解釈(概念化)させるということが本質的であると指摘する(Кронгауз 1998:127)。

議論の検討を通して、筆者は接頭辞 *za-* の開始意味を、単なる持続するプロセスの起動ではなく、「主体の新たな特徴づけとなる動的事象を描写する場面の出現」であることを

¹ ザリズニャクは、接頭辞の全ての個別的意味は、空間的意味から派生したものであるとする立場を支持する。派生の結果、非空間的意味を獲得した接頭辞意味においても、その元来の“空間的概念”(意味特徴 SPACE)が何らかの形で存在することが多いとする(Зализняк 1995:156)。たとえば、接頭辞 *za-* の空間的意味特徴は BEHIND, IN, EDGE, UP, DEVIA, FAR であり、開始の意味はその中の IN から派生している。

ザリズニャクの動詞リストにおいて、BEIGN と SPACE の意味特徴を有するものは次のものである(記号#は派生動詞において接頭辞と基幹動詞が意味的に完全に分離できないものを表わす); завести 2. <собаку> # SPACE, BEGIN (иметь); завести 3. <мотор, часы > #SPACE, BEGIN (функционировать); заговорить 2. <с кем-л., о чем-л.> BEGIN, SPACE; закурить 1. ‘начать курить сигарету’ BEGIN, SPACE; запеть BEGIN, SPACE; запить 4. ‘начать пьянствовать’ BEGIN, SPACE (IN); запустить 1. <спутник> # SPACE (IN, FAR), BEGIN (функционировать); зачуть SPACE (FAR), BEGIN (Зализняк 1995:163-169)。また、закричать に SPACE の意味特徴を加えることについては、178 ページで述べられている。これらの動詞において、どのような意味特徴をもって“空間的”とされるのかは明確ではない。

提案する。その際、出現するのが動的事象そのもののプロセスではなく、「場面」であることに注意を要する。ここで言う「場面」には、基幹動詞が意味する動的事象が、即座に、明確に、それと同定されるような“形”で描写されている。場面上に描写され、話者によって同定された動的事象は、それが関連する主体のありかたを特徴づける(主体が何かをするというしかたではない)。動的事象が主体の特徴付けとして提示されるということは、その動的事象が時間枠の外で提示されていることを示す。いわば、「場面」という“空間枠”の中でそれは提示されていると考えられるであろう。動的事象のプロセス的側面がいわば時間軸に沿ったコマ送りの提示の仕方を取るとすれば、「場面」における動的事象は、その空間的に限られた枠内で、同定的機能のもとに提示されるといえる。

接頭辞 *за-*が「主体の新たな特徴づけとなる動的事象を描写する場面の出現」を意味することについて *заработать* を例に検証する。

(13) *Мотор заработал.*

(14) **Он сел за стол и заработал.*

(15) *Дворник быстро заработал метлой.*

(16) *Дворник *заработал / начал работать/ сегодня в 7 часов утра.*

(17) *Дворник *заработал / начал работать / первым.*

(18) *Дворник *заработал / начал работать / в школе № 4.*

(13), (14)は接頭辞 *за-*の選択的結合性の例として頻繁に挙げられるものであり、通常、2.1, 2.2.で検討したような解釈が与えられる。筆者の立場から、両者の差異は次のように説明される。(13)が可能なのは、モーターが“*работает*” (動”いている＝機能している)と同定できるような明確な動的場面が出現することで、モーターの新たな特徴付けがなされるからであり、(14)が許容されないのは、人動作主が具体的に“*работает*” (作業している)と同定できるような場面が成立していないから、ということになる。

主体の特徴付けとなるような動的場面の成立、つまり、その場面に描写された動的事象が主体に対する新たな“特徴”として概念化されるためには、場面に描写される動的事象は安定したものでなければならない。言い換えれば、新たに出現した動的事象が同定されるに足る程度定着した時点で、動的事象は主体の特徴として認知されることになる。したがって、基幹動詞の表わす動的事象の種類によっては、同定までにいくつかの段階的プロセスを踏まないとならないものや、瞬間的に同定されるものがあることが予想される。前者に属するタイプには、接頭辞 *за-*が多回行為および習慣的行為と結びつきやすい事実が挙げられる。それらの動的事象の安定性は、その同定を容易くし、したがって、話者に主体の特徴として認定させることを容易にさせるからである。後者には、必ずしも開始後の

持続的プロセスを意味しない *закричать* 等が属すると考えられる¹。なぜなら、*кричать* などの音響的事象は、その事態が出現したと同時に基幹動詞で名付けられる行為として同定されるものだからである。

このような視点において、ザリズニャクの「接頭辞 *за-*と結合する基幹動詞が表わす行為は、動的事象の質的内容の統一を保つ必要がある」という指摘と、筆者の意見は類似する。同時に、この点がザリズニャクの提案する「均質プロセス性」の観点が生じる基盤となっていると考えられる。ザリズニャクは、均質プロセスを時間軸に沿った形で提示することによって、均質プロセス性がプロセスの終局位相の欠如、すなわち、限界性の欠如を要求するという結論に至った。しかし、動的事象の均質性、より正確に言えば、それと同定されるような質的内容の統一性、が時間軸上ではなく、場面という限られた空間枠の中で提示されれば、均質性と限界性を結びつける必要はなくなる。

一般に、人動作主が基幹動詞、*работать*、で表わされる行為を開始する事態は、*за-*派生動詞で表わすことができないとされるが、人動作主であれば全て *за-*派生動詞を許容しないというわけではない。人の動作主(*дворник*)を主語にとる(15)が許容されるのは、動作の道具として造格補語で現れる「箒(*метла*)」の存在による。この文は行為主体である掃除夫の特徴付けとして「箒で作業をしている」という場面が出現したことを表わす。多くの動的事象は、通常、何らかの様態を付随し進行することが多い。動的事象の場面化に際しては、行為の様態を表わす意味構成素は場面を構成する積極的な“参加者”と捉えられる。一方、(16)、(17)、(18)が許容されない理由は、それらの状況語が文中で主体の新たな特徴付けとなる動的事象について直接述べているわけではないからだと考えられる。行為開始の時刻(16)、順序(17)、場所(18)等は、行為が開始される環境についての記述であって、行為そのものに備わった様態を表わすものではなく、言い換えれば、動的事象を描写する場面の構成に参加していない。したがって、状況語の中でも、この場合、様態の状況語のみが開始の *за-*派生動詞との結合を可能にすると考えられる。

3. *Начать* の位相動詞構文の開始意味と *за-*派生動詞の開始意味

接頭辞 *за-*の表わす、いわゆる、開始意味が、実際には起動的開始ではなく、「主体の新たな特徴づけとなる動的事象を描写する場面の出現」であるならば、これまで等価的に扱われてきた *за-*派生動詞と *начать* の位相動詞構文が表わす“開始の状況”は異なると仮定する根拠になる。両者が大きく異なる点の一つは、接頭辞 *за-*が直接補語(他動詞)を許容しに

¹ 動的事象が開始後、直ちに終了するような例として：*Загрохотало за лесом и сразу стихло; На миг вдали что-то зачернело.* (Петрухина2000:198)

くい点である。まさにこの特徴こそが、多くの場合に互換可能な *за*-派生動詞と *начать* の位相動詞構文との互換を許さない。これは、言い換えれば、他動詞の基幹動詞が *за*-派生動詞を形成しにくい事実こそが、接頭辞 *за*-によって表わされる開始意味の本質を示唆していると考えられる。

したがって、筆者は、等価的な開始表現とされる *начать* の位相動詞構文と *за*-派生動詞は、実際には、異なる開始の状況を記述すると考える。異なる開始の状況を記述するというのは、すなわち、各表現手段によって表わされる動的事象の“開始”の認知的枠組みが、各々の表現形式で異なるということに他ならない。このことを立証するために、下記ではいくつかの論理的、文法的側面の相互関係を用いながら検証する。

3.1. 動的事象の開始の概念的枠組み

動的事象の開始はその論理形式として、通常、「行為主体が…している状況が始まる」と解釈することができる。たとえば、*Девушка начала танцевать* 「少女が踊り始めた」は‘少女が踊っているという状況が存在し始めた(*начала иметь место ситуация Девушка танцует*)’と解釈されるように(Храковский 2001:154)。この形式には「(状況の)開始」と「(開始される)状況」を述べる二つの陳述要素がある。両者の関係は、意味的に完結した何らかの状況に、「開始」という位相意味が加わるという、いわば、修飾されるもの(状況)と修飾するもの(開始の位相意味)という関係にある。この場合、「状況」を形成するのは、何らかの持続するプロセスの存在と考えられてきたが、*за*-派生動詞に関していけば、2章で扱ったように、動的事象がプロセスという提示の仕方を取るとは必ずしも限らない。開始される状況がプロセスからなるか否かという点はここでは重要ではないので、単に状況として扱う。開始される状況を意味する陳述動詞は常に不完了体形式であり、通常、単純動詞で表わされる(*начать работать, заговорить*)。「開始(BEGIN)」と「状況(S – situation)」を表わす二つの陳述要素のまとまりを、便宜的に、**BEGIN [S]**と表わす。

Начать の位相動詞構文と *за*-派生動詞によって表わされる開始の状況が同一である、とみなす場合、具体例を用いると、**BEGIN [S]**は下記のように図示できる。視覚的にわかりやすいように、開始される状況[S]を点線で囲み、行為開始の事態全体を四角で囲むことにする。太字の箇所が **BEGIN** の意味要素を持つ部分である。

- | | | |
|-------|---|---|
| (19a) | <i>начать</i> А <i>ХОДИТЬ ПО КОМНАТЕ</i> | BEGIN [<i>ходить по комнате</i>] [部屋を歩き回っている]ことが始まる |
| (19б) | <i>за-</i> В <i>ХОДИТЬ ПО КОМНАТЕ</i> | BEGIN [<i>ходить по комнате</i>] [部屋を歩き回っている]ことが始まる |

(20a) начать Считать книгу

BEGIN [читать книгу]
[本を読んでいる]ことが始まる

(206) *за- Dчитать книгу

*BEGIN [читать книгу]
[本を読んでいる]ことが始まる

(19a)と(196)は、通常、等価表現とされるものであり、開始の意味要素が(21a)の場合は位相動詞 *начать* で、(196)の場合は接頭辞 *за-*で担われているという形式上の差違を有する。したがって、開始される状況のみを文中から取り出せば、(19a)[^]*ходить по комнате*=(196)^B*ходить по комнате*が成立する。同様に、(20a)と(206)の組み合わせに関して、開始される状況だけを考えた場合、文中の関連する部分要素だけを実験的に取り上げれば、形式的には(20a)^C*читать книгу* = (206)^D*читать книгу*となる。しかし、実際には、(206)の *за-*派生動詞は許容されない。その理由は、ザリズニャクの言葉を借りれば、当該の動詞 (*читать*)は直接補語を取るゆえに、行為は限界性を有する、すなわち、「均質プロセス性」が欠如する。接頭辞 *за-*で開始を表わすことができるのは、均質プロセス性を有する動的事象であるから、したがって、(206)は許容されない、ということになる(Зализняк 1995:176)。

状況を表わす動詞句に関するこの説明は、(20a)の同じ状況を扱った *начать* の位相動詞構文にも該当するものと考えられるから、(206)の非許容性は、一般的な「状況」と「開始」の概念的関係ではなく、限定された「状況」についてしかその開始を表わすことができないという開始接頭辞 *за-*の“選択性”に由来すると言えるであろう。このことは、仮に、接頭辞 *за-*の開始される状況に関する選択性の問題を無視するならば、*начать* の位相動詞構文と *за-*派生動詞の両者は、常に、文中で同一の開始される状況を示していると考えることができる。言い換えれば、(20a)^C*читать книгу* と (206)^D*читать книгу* は、開始される状況としては同一であるのだが、接頭辞 *за-*の状況に関する選択性のために、(206)は許容されないのだ、という説明が成り立つ。しかし、筆者は *начать* の位相動詞構文と *за-*派生動詞が表わす開始される状況は、同一の状況ではないという立場に立ち、下記で検証する。

3.2. 完了体動詞と不完了体動詞における対象の性質について

(20a)^C*читать книгу* はもともと(20a)*начать читать книгу* から取り出したものであり、(206)^D*читать книгу* は(206)**зачитать книгу* の部分である。対格の直接補語(*книгу*)に関する両者の大きな違いは、前者は不完了体動詞 *читать* の直接的作用を受ける対象であり、後者は派生の完了体動詞 *зачитать* の対象としてあることである。

ヴェシュビツカ(1967)は完了体動詞が要求する対象と、不完了体動詞が要求する対象は、各対象の意味構造が異なると指摘する(Wierzbicka1967:2236-2240)。

(21a) Он ел кашу¹

(21б) Он съел кашу (=Он съел всю кашу)

(21в) Он съел миску каши / немного каши

(21г) *Он ел всю кашу / миску каши / немного каши

(22a) Он пил молоко

(22б) Он выпил молоко (=Он выпил все молоко)

(22в) Он выпил стакан молока / молока.

(22г) *Он пил все молоко / стакан молока / молока.

(21г), (22г)が示すように、不完了体動詞文における直接対格は量的表現を用いることができない。一方、完了体動詞文においては、対象の具体的な量的把握が必須である。(21б), (22б)のように、量的表現の指標が形式的に欠如している場合でも、対象の数量的把握は意味的に存在する。位相動詞 *начать* と結合する不完了体の陳述動詞句においても、数量詞を用いた際の不自然さが観察される²。

(23a) Он прочитал одну / всю книгу.

(23б) *Он читает одну / всю книгу.

(23в) *Он начал читать одну / всю книгу.

(24a) Он построил один дом / весь дом.

(24б) Он строит ?один / *весь дом.

(24в) Он начал строить ?один / *весь дом.

(23a), (24a)では自然な数量詞の使用であるが、不完了体動詞文および位相動詞構文で用いられる場合、全体として不自然な文となるか、あるいは許容されない。(23б), (23в), (24б), (24в)で用いられる“одну книгу”, “один дом”を、数量表現として、「一冊」「一軒」と解釈することは困難である³。このことは、たとえば、「本を読みはじめる」という状況において、当然、手に取って読める本は一度に一冊である、という私たちの経験上当り前

¹ ヴェシュビツカの例文はポーランド語であるが、ロシア語訳は彼女の論文を引用しているグロヴィンスカヤのものを使用する(Гловинская1982:31)

² 文の許容性の判断はロシア語インフォーマントによる。Эдуард Станиславович Ревидович, 1977年ハバロフスク生まれ、ハバロフスク育ち。2000年来日、現在東京都在住。ハバロフスク教育大学卒。

³ しかし、*один(одна, одно, одни)*が数量詞としてではなく、不定代名詞として用いられたときには当該の表現は可能である。例 *он читает одну книгу* (彼はある本を読んでいる)。

と考えられる事実における「一冊」とは異なる。ロシア語インフォーマントは、その瞬間に読んでいる本は一冊であり、建てている家は一軒であるのが当然であるから、そのような数詞は必要ない、とコメントしたが、これは文法的な制限と我々の現実の経験からくる知識が表面上一致したために起こる誤解と考えられる。

したがって、(206)*зачитать книгу における対象 книгу は、「一冊の本」という数量を積極的に表わすが、(20a)начать читать книгу における対象 книгу は量的に把握されないものであるといえる。

では、不完了体動詞文における対象はどのような性質を持っているのであろうか。ヴェシュビツカは「無限の連続体(endless 'continuum）」、「形を持たない実体 ('substance without form)」（Wierzbicka 1967:2237)として扱われていると指摘する。このような場合、不完了体動詞文における対象はその存在のみを主張する「存在の量詞(existential quantifier)」としての機能を持つものであり、ヴェシュビツカの解釈に従うと、(21a)の例は「彼がカーシヤを食べていたという瞬間がある(there exists a moment, when he was eating porridge)」ことを記述する文となる(Wierzbicka 1967:2236 また、参照 Гловинская 1982:32)。この不完了体動詞文の解釈は、ある瞬間の存在に言及する主節部分(there exists a moment)と瞬間の内容(he was eating porridge)を具体的に表わす従属節部分とに分けることができる。これを筆者が3.1.で示した開始位相の論理形式「行為主体が…している状況が始まる」に当てはめるならば、「S(主語)が…している瞬間があるような状況が始まる(the situation starts in which there exists a moment, when S is doing something)」と再解釈することができる。その際、主節部分は状況の開始であり、従属部分は具体的な状況の説明となるが、その状況は不完了体動詞文によって内容的に完成しているものとなる。対象は不完了体動詞と共に状況を完成させる一構成素となる。したがって、(20a)начать читать книгу では、不完了体動詞とその要求する対象が「本を読んでいる」という完成された状況を作りあげ、全体として「本を読んでいるという状況が始まった」を意味するが、(206)*зачитать книгу における完了体動詞と対象の関係はこうした完成した状況を作ることができない。

つまり、(20a)^Cчитать книгу ≠ (206)^Dчитать книгу であり、両者は同じ状況を示していないということになる。ならば、さきほど(19a)^Aходить по комнате=(196)^Bходить по комнате のように表わしていた(19a)の位相動詞表現と(196)の за-派生動詞の対立においても、表わされる開始の状況が本当に等式の関係にあるのかが疑問となる。同時に 3.1.の(19a)～(206)で構築した開始の概念的枠組みも見直す必要が出てくる。

3.3.開始という事実のあり方——論理的側面と文法的側面

3.2.では、начать の位相動詞構文で表される開始される状況と、за-派生動詞で表されるそれとは、状況を表わす陳述動詞の体形式の差違と動詞の作用を受ける対象の性質の差違に

よって、同一の状況ではないということを指摘した。その事実を踏まえ、体の文法的制約を考慮に入れて、開始の概念的枠組みの再構築を試みる。

3.1.で考察したように、開始出来事概念の構造は「(状況の)開始」, 「(開始される)状況」から成り立ち、両者の関係は修飾するものと修飾されるものの関係にある。したがって、開始意味の修飾を受ける状況はそれ自身で完成していることが必要である。その際、不完了体陳述動詞句はそれだけで完成状況を提示するが、完了体陳述動詞句は不完了体陳述動詞句と同じようには完成状況を表わすことができない。ここで、開始表現の成立には、開始される状況が状況としてそれ自身完成しているかどうか文の正否を決定する、と仮定しその論証を試みたい。その際、体形式の差違と開始の概念的枠組みを存在論的見地から捉えることが有効である。さまざまな論理的概念についてここで詳しく論じることはせず、最小限に留める。

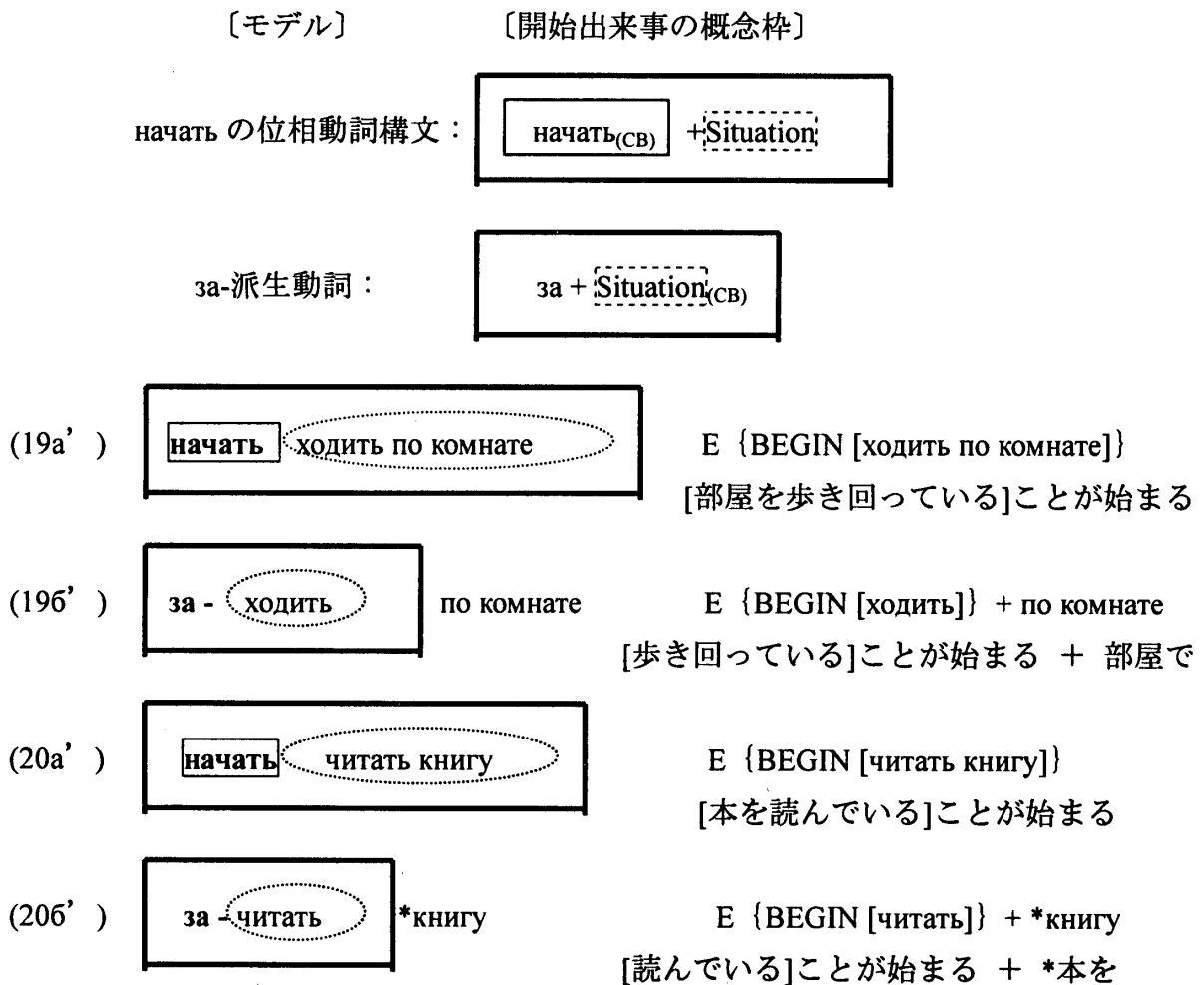
フォン・ウリクト(1963)は、外的世界における事実のあり方を「出来事」「プロセス」「諸事象状態」の主要三タイプに区別した。単純に言えば、「諸事象状態」は“静的”であり(例：私のタイプライターが机の上にある)、「プロセス」は“動的”なもの(例：雨が降っている)と提示される。一方、出来事はそれらの諸事象タイプの移行として理解される(例：窓を開ける←窓が開いていない諸事象状態から、窓が開いているという別の諸事象状態への移行)(ウリクト 1963:31)。したがって、筆者の関心のある動的事象の開始という事態は、「出来事」と名付けられる事象タイプの属することになる。そして開始の出来事は、開始される状況が表わすプロセスあるいは諸事象状態への移行と解釈される¹。

このような現実世界の概念化の手法は、昨今、言語学の世界にも積極的に取り入れられており、その試みは、特に、ロシア語の完了体の意味を“状況の交替”(Шатуновский 1996 他)、“新しい状態の到来”(Падучева 1996 他)と規定する中にも如実に現れていると言える。その中でも、ザリズニャク、シュメリヨフは、完了体は常に「出来事」(=新しい状態への移行)を表わすと規定する(Зализняк, Шмелев 2000:35-36)。筆者も、ロシア語においては、通常、出来事は完了体によって表わされ、プロセス、諸事象状態は不完了体によって表されるとする立場を支持する。したがって、開始の概念構造を成立させるには、(1)開始の概念構造は意味的に(状況の)開始と(開始される)状況という二つの陳述要素から構成される、という点に加えて、(2)開始は事象タイプから言えば出来事である、という二点を満たすことが必要になる。

¹ 「走り始める」=走っていない状態から走るというプロセスへの移行[状態→プロセス]; 「存在し始める」=存在していない状態から存在している状態への移行[状態¹→状態²]; 「(走っていた人が)歩き始める」=走るというプロセスから歩くというプロセスへの移行[プロセス¹→プロセス²] (Wright 1963 – 日本語訳 2000:33-34, 44)

完了体の位相動詞 *начать* の場合、それだけで「(何かが)開始される」という出来事を表わす。しかし、*начать* の補助動詞的な性質から、それだけでは、意味的に不十分であり、開始される状況の描写は、それ以降の不完了体陳述動詞句でなされることになる。この際、開始される状況を述べる陳述動詞句は、何よりも、意味的な結合価を埋めるために必要とされる。位相動詞 *начать* のこの特徴に対して、*за-*派生動詞は、開始の意味要素である接頭辞 *за-*と基幹動詞が結合して、完了体動詞となるわけであるが、この場合、*за-*派生動詞一つで、論理的にも意味的十分性からも完成した状況の開始という出来事を表わす表現となると考えられる。先程の構造式(3.1)には、開始が出来事であるということを示すために、出来事(Event)の記号 E を加え、E {BEGIN [S]} と書き換える。下記の図では、開始される完成状況を点線で囲み、太線の四角枠で開始出来事全体の概念枠を示す。出来事性を表わす完了体指標は細線の四角枠で囲む。したがって、完了体の *за-*派生動詞では、出来事性と開始出来事全体の概念枠は重なることになる。

図 1



上記の図から、3.2.で生じた疑問、(19a)^A *ходить по комнате* と(196)^B *ходить по комнате* について、それらが同じ状況を述べたものではないことが明らかになる。状況語 *по*

комнате は、(19a')では、不完了体動詞 ходить とともに、開始される状況を構成し、完成させる要素であるが、(19b')では、出来事(заходить)が生じる外的環境(場面)について補足的に述べているにすぎない。その際、完成状況は基幹動詞の ходить のみで表わされる。

(20a')についても、同様に、開始される完成状況は不完了体陳述動詞句全体で表わされるが、(20b')の場合、開始の出来事は、完成した状況(читать)を内包する за-派生動詞一語で成立しているため、その中に直接補語(книгу)を必要とする“スペース”は無い。言い換えれば、出来事に既に埋め込まれた完成状況に、動作の対象が何らかの影響を与えることは不可能である。したがって、за-派生動詞がそれのみで、「開始出来事」の概念枠を意味的にも事実的なあり方としても完成させる」という事実こそが、за-派生動詞に自動詞が多いこと、そして直接補語を許容しにくいことを説明する。

4. おわりに

動的事象の開始の概念構造を成立させるには、(1)開始と(開始される)状況を表わす二つの陳述要素、(2)開始の出来事性、という二つの条件を満たすことが必要である。その際、(1)に関しては、開始意味によって修飾される状況は、状況として完成したものでなければならない。(2)に関しては、ロシア語において出来事性は、通常、動詞の完了体形式で担われている。

完了体の за-派生動詞はその派生動詞形式の中で、開始の意味要素と完成状況を表わす陳述動詞が結合し、開始出来事として成立する。この時点で、状況の陳述動詞、つまり、基幹動詞、と意味的に結合するはずであった直接補語はそれと結合することができなくなる。一方の位相動詞 начать は、完了体動詞として開始の出来事性は満たすものの、その補助動詞的な特徴から、それだけでは動的事象の開始の概念構造を成立させる「開始」と「(開始される)状況」という二つの陳述要素のうち、後者を満たすことができない。したがって、位相動詞 начать に後続し、開始される状況を表わす陳述動詞句が必須要素となる。つまり、不完了体陳述動詞句を意味的に含めた形で開始出来事を完成させる。一見、等価的とされる начать の位相動詞構文と за-派生動詞は、実際には、異なる開始の概念構造を持つ可能性を論じた。

しかし、等価的とされる за-派生動詞と начать の位相動詞構文の差違は、開始の概念構造における差異だけではない。例えば、Мотор заработал – *Человек заработал における差違は両者における開始の概念構造の差違からは説明できない。そもそも、位相動詞 начать が語彙的に開始を表わすのに対し、接頭辞 за-は直接的に開始を表わすものではない。筆者は за-派生動詞の開始意味について、その先駆者の議論を検討する中で、за-派生動詞が表わす開始意味は、起動的開始ではなく、「主体の新たな特徴づけとなる動的事象を描写

する場面の出現」であることを提案した。3a-派生動詞の表わす「場面の出現」という状況が、どのように *начать* の位相動詞構文と等価的とされるような「開始表現」として解釈されるのかについては、今後検討したい。

また、本稿では扱えなかった他動詞の 3a-派生動詞について、ある資料では、直接補語を取る他動詞の 3a-派生動詞は、語彙意味的にかなり限定されるものの、3a-派生動詞全体の 20%弱にあたるとする(Демиденко 1963a – Храковский 2001:158 より)。他動性を許容するのは、主に、音や発話の動詞とされるが、この際、直接補語で表わされる対象は、3a-派生動詞の基幹動詞で表わされる動的事象の場面化に際して、行為の様態に類似するような、場面構成の積極的な“参加者”としての役割を有するのではないかと考えられる。

引用・参考文献

- Апресян, Ю. Д. (1974). *Лексическая семантика. Синонимические средства языка*. Москва.
- Гловинская, М. Я. (1982). *Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола*. Москва.
- Гловинская, М. Я. (1998). *Инвариант совершенного вида в русском языке. Типология вида: проблемы, поиски, решения* (С.125-134). Москва.
- Добрушина, Е. Р., Меппина, Е. А. и Пайар, Д. (2001). *Русские приставки: многозначность и семантическое единство*. Москва. (сокращенно – РП)
- Зализняк, Анна А. (1995). Опыт моделирования семантики приставочных глаголов в русском языке. *Russian Linguistics*. 19 (2): 143-185.
- Зализняк, Анна А. и Шмелев, А. Д. (2000). *Введение в русскую аспектологию*. Москва.
- Карамышева, Л. М. и Мирошникова, М. Г. (1999). *Глагольные приставки: Учебно-методическое пособие*. СПб.
- Кронгауз, М. А. (1998). *Приставки и глаголы в русском языке: семантическая грамматика*. Москва.
- Маслов, Ю. С. (1978). К основаниям сопоставительной аспектологии. *Вопросы сопоставительной аспектологии*. Ленинград.
- Падучева, Е. В. (1996). *Семантические исследования*. Москва.
- Петрухина, Е. В. (1996). Глаголы деятельности и их фазисно-временные модификации в современном русском языке. *Исследования по глаголу в славянских языках. Глагольная*

лексика с точки зрения семантики, словообразования, грамматики (С.90-105).
Москва.

Петрухина, Е. В. (1997). Основные принципы сопоставления модификаций глагольных действий в славянских языках. *Проблемы изучения отношений эквивалентности в славянских языках* (С.158-180). Москва.

Петрухина, Е. В. (1998). Грамматическая и лексическая категоризация действий и их параметров в славянских языках. *Научные доклады филологического факультета МГУ*. 3:71-90. Москва.

Петрухина, Е. В. (2000). *Аспектуальные категории глагола в русском языке*. Москва.

Храковский, В. С. (2001). Фазовость. *Теория функциональной грамматики: введение, аспектуальность, временная локализованность, таксис* (С.153-195). Москва.

Шатуновский, И. Б. (1996). *Семантика предложения и нереперентные слова*. Москва.

von Wright, G.H. (1963). *Norm and Action*.

Wierzbicka, A. (1967). On the Semantics of the Verbal Aspect in Polish. *To Honor Roman Jakobson. Essays on the Occasion of his Seventieth Birthday* (p.2231-2249). The Hague – Paris: Mouton.

フォン・ウリクト, G. H. (2000). 稲田静樹訳『規範と行動の論理学』東海大学出版会.

金子百合子 (2001). 「行為の開始を表わすロシア語動詞接頭辞についての一考察～研究ノート」『木二会年報ロシア語研究』第14号, 16-26頁.

引用辞書・文法書

АГ-80 – *Русская грамматика* (1980). Т.1. Под ред. Шведовой, Н. Ю. Москва.

РГ-79 – *Русская грамматика* (1979). Т.1. Horálek, K. (et al.Eds.). Praha.

БТС – *Большой толковый словарь* (1998). Под ред. Кузнецова, С. А. СПб.

О «начинательном» значении глагольной приставки за-

КАНЭКО Юрико

В настоящей статье рассматривается так называемое «начинательное» (инхоативное) значение глагольной приставки *за-*, а также понятийно-структурное различие между приставочными *за-* глаголами и эквивалентной с ними конструкцией с фазовым глаголом *начать* + инфинитивом.

В этом направлении давно обсуждается вопрос о сильной избирательной сочетаемости «начинательного» *за-* (*Мотор заработал*, но не **Отец заработал*; *Телефон зазвонил*, но не **Мама зазвонила по телефону*). Проанализировав предложенные по этому поводу два возможных решения, в частности, понятие гомогенного процесса и понятие перехода из отсутствия процесса в его наличие, автор пришел к выводу, что *за-* глаголы представляют глагольное действие не как некий развивающийся во времени процесс, а как новая характеристика его субъекта. При этом действие представлено как бы на определенной “сцене”, т.е. в ограниченном пространстве, в котором оно идентифицируется как таковое.

Другим примером избирательности *за-* глаголов является их плохая сочетаемость с прямым дополнением, а в конструкции с *начать* нет такого запрета (*начать читать книгу* – **зачитать книгу*). По мнению автора, *за-* глаголы структурируют целое понятие начала действия, выражая момент начала и его событийность семантикой и перфективирующей функцией *за-*, а начинающееся действие – глагольной основой и только этой. Таким образом, в *за-* глаголах начало действия как событие уже целиком представлено, что не допускает лишнего дополнения. В то время глагол *начать* не может структурировать целое понятие начала действия без глагольной фразы, указывающей начинающуюся ситуацию.